

「靴の歴史散歩」は、東京都立皮革技術センター台東支所の『かわとはきもの』（年4回発行）に、昭和61年（1986）6月発行の第56号から、連載を開始したものである。以来、第173号の今号まで、29年間、一回も休むことなく続けられたことは、我が身の健康も含め、ありがたい記録と感謝している。

この間に、これをまとめた単行本が2冊、『靴づくりの文化史』（稲川 實・山本芳美共著・現代書館・2011年刊）

『西洋靴事始め』（稲川 實・現代書館・2013年刊）と上梓できたことは、身に余るご褒美を頂戴したと思っている。

これまでの経過で、日本の皮革・製靴業の祖・西村勝三翁については、遺された史料もあったから、いささかなりと事績の顕彰ができたかと思う。しかし、肝腎の浅草の地場産業の成り立ちや、歴史については、その多くを語り残しているのも事実である。

ちょうど連載の区切りも良かったので、「靴の歴史散歩」⑩から、存在資料の少ないのも承知で、ひたすら弾家の事業を追い求めて行こうと、書き始めたものである。弾直樹の事業は、明治22年（1889）初代直樹の死によって終わらず、直樹の次男祐之助が二代直樹を襲名、遺業を継続させたことは幸いであった。資料が無いと愚痴りながら、回を重ねること16回、通算4年とは良く続いたものである。思ってもみなかった直樹の四男弾慎平（クロームなめしの先駆者）の「東京皮革製造所」の発掘まで、辿り着けたことは、まことに幸運なこと

であった。ただ残念なことは、昭和6年（1931）の日本皮革時報社の『創刊三十周年記念号』の祝賀協賛広告を最後に、まるで神隠しにでも遭ったように業界から消えたのは、何とも不可解でならない。どこかの図書館に、昭和10年前後発行の業界紙が、人知れず書庫に埋もれていないだろうか。夢でも良いから見たいものである。

写真は、旧橋場銭座跡、現在の東京都人権プラザ（橋場1-1-6）

この地は、明治5年（1872）1月、弾直樹（1823-1889）が、王子滝野川から製革・製靴の工場を移転、浅草で最初に操業した地である。

